

(別紙の2)

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は玄関先及びユニットフロアに掲示しており、ユニット会議の時には全員で唱和をしている。	理念については玄関先、各ユニットの目につき易い所に掲示すると共にユニット会議開催時には全員で唱和し、理念の主旨についても話し合い共有と実践に繋げている。新入職員については施設長が理念について説明している。家族に対しては利用契約時にパンフレットを用い理念に沿った支援内容について説明している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年度もコロナ禍により、全ての行事がストップしたままだが、年5回の近所の幼稚園との交流は今後再開していきたい。ただ認知症カフェは準備も大変な為、再開の目途が立たず、中止案件とした。	開設以来自治会費を納め地域の一員として活動している。新型コロナ禍が長引き全ての地域行事が中止となり残念な状況が続いている。市主催の「いきいきサロン」が再開されているが、現在、当ホームとしては参加を自粛しており、状況を見極め参加して行く意向でいる。そうした中でも中学生の職場体験としての来訪が3日間あり、傾聴中心に利用者との交流をしたという。また、近所の保育園児との交流も現在は自粛しているが、再開を予定し準備している。更に、近隣住民から夏野菜の差し入れを沢山頂き、食事に取り入れている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	やっとコロナ禍が解けたので、利用者の散歩や外出を増やして、地域とのつながりを今後も断たない様に努力していく所存です。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議を施設とは別の場所で定期的に開催して、施設の現在の状況をお伝えし、ご理解頂く機会としている。	新型コロナ禍の状況が続く中、ホームでの開催を避け隣接の事務所において2ヶ月に1回偶数月に開催している。利用者代表、家族代表、区長、自治会長、民生委員、寺院の住職、市職員、ホーム関係者の出席の下、「コロナ対応についての報告」「利用状況の報告」「行事計画と活動報告」「意見交換」等を行いサービスの向上に繋げている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	日頃から市役所とは密に連携をとっている。地域包括支援センターや福祉課とは職員教育やオレンジネットフレンズとの交流を通じ、情報を頂いている。	市の担当部署とは職員の運営推進会議出席を通して様々な事柄について連携を深めている。また、メールを使用してきめ細かな情報共有に努め、運営の向上に繋げている。市主催の「いきいきサロン」については現在は参加を自粛しているが、状況を見極め参加したいという意向を持っている。介護認定更新調査は調査員がホームに来訪し、ケアマネジャーが対応している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ユニット会議でのケア検討の時に折に触れ、身体拘束に触れる行為について伝えていく。	介護方針として拘束のないケアに取り組んでいる。外出を希望する利用者が多いが、職員と1対1で短時間、ホーム周りを散歩することで対応している。玄関は日中開錠されているが、出入りをチャイム音で知らせるように工夫している。転倒等避け安全に過ごしていただくため足元センサーを利用している方が数名おり、また、起き上がりセンサー使用の方が若干名いる。また、廊下にはトイレ利用者が分かるよう人感センサーが設置されている。毎月開かれるユニット会議の中で行われるケア検討の際に拘束についても話し合い、意識を高め取り組んでいる。	

認知症グループホームたのしや駒ヶ根・けやきユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	介護現場の常で、スタッフの入れ替わりも多く、虐待防止の研修は年間の研修で最低1回は必須となっている。肅々と遂行していく。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度については、数名利用している人がいる。一般職員も学ぶ姿勢が必要と痛感している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所時に説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進委員会を開き、コロナで中止されてた2ヶ月に一回の介護サービス相談員の訪問も、段々と再開されると思われる。	家族の面会については5月8日以降の新型コロナの5類移行を受け対面での面会が再開され、事前に連絡を頂き面会前に抗原検査キットを用い陰性が確認された場合に時間を制限して相談室での面会を行っている。また、利用者のホームでの生活の様子は毎月発行されるお便り「たのしや駒ヶ根」で家族等にお知らせし、利用者一人ひとりの様子は担当職員よりの手書きの手紙で毎月お届けして、家族にも喜ばれている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のユニット会議で、職員の意見を出しやすい雰囲気作りに努めている、意見が運営に反映しやすいようにしている。	月1回、第2水曜日と第2木曜日にユニット会議を行っている。今年度より両ユニットのリーダーが30歳代の若い男性に代わり、今までより増して内容の濃い会議が開催されるようになっており、決めたことは速やかに実行するようになっている。きめ細かなカンファレンス、連絡事項、各種勉強会、意見交換等を行いケア内容の充実に繋げている。また、年1回、10月に代表者と施設長による個人面談が行われ、意見交換の場としてモチベーションアップに繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	コロナ禍で昨年度は個人面談は中止だった。ただ65歳以下の職員を正社員に極力登用すべく努力している。65歳以上も自身の働き方にあった勤務時間にできる様調整に応じている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍で外部研修は減少しているが、今年も1名認知症実践者研修を受けてもらう。また、ケアマネ、介護福祉士、初任者研修挑戦を積極的に勧めている。		

認知症グループホームたのしや駒ヶ根・けやきユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	平成30年度まで、市で立ち上げた「認知症対応力向上委員会」(ケア者のカフェ)に参加していたが、今年度は中止。コロナ収束後に形は変わるかもしれないが、再開を期待する。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	慣れて頂くまで、家族にも協力を願って、集中して見守り&ケアに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用を決めるまでの経緯と家族の本人への気持ちを受け止めて、共有して、まず家族に安心してもらえるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	必要と分かった時に、その都度本人家族も含め話し合い、早めのサービス導入に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	常に本人の意思を尊重できるように心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族に常に今の状態を知って頂くことで、家族の協力なしには認知症のケアが成り立たない事を知って頂くよう努めているが、現実には遠方にいたり、関係の薄い家族も増えていて、預けっぱなしが増えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族や友達との食事外出、外泊の支援を積極的に働きかけている。	5月8日以降の新型コロナ5類移行を受け、友人、知人の方の面会も再開され、面会時、抗原検査キットで検査をして面会をしている。また、お盆の際には家族の送迎で家に戻られた利用者も数名おり、家族と食事外出をされている方もいる。理美容については3ヶ月に1回、顔馴染みとなった訪問美容師が来訪し、カットしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずにご利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士が支えあえる様な関係ができるように、関係作りに努めている。		

認知症グループホームたのしや駒ヶ根・けやきユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	必要があれば、退所されてからの経過を関係諸機関や家族に伺って、相談や支援に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	理念を読み合わせる事によって、「その人を中心においたケア」とは何かを考えてもらっている。そうする事によって、とすればこちらからサイド側の都合によるケアになりがちになるのを戒めている。	殆んどの利用者が自分の意思を伝えられる状況であるが、若干名の利用者が難しい状況下であり表情や行動より思いを受け止めるようにしている。また、日々の生活の中で利用者の言葉を拾い、気づいた事柄については介護記録に書き加え、毎日の申し送りの中でも職員同士で確認し合い、思いやりのある支援に繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	個々人の事情によって違うが、馴染みの物を持ってきて頂いて、安心できる空間作りを心がけている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプランによって、ケアの方向性を決めているが、何かある度にその場にいる職員間だけでも、カンファを開き、早めにその方にあつた支援ができるように努めている。その後の情報の共有は連絡ノートでしている。	一般職員は1名、リーダー職は2名の利用者を担当し、家族へのお便りの作成、日々の状況把握に努めている。毎月のユニット会議の席上のカンファレンスで半年に1回のモニタリングを行い、家族の希望は電話で伺い、ケアマネジャーが1年間のプラン作成に繋げている。そうした中、状況に変化が見られた時には随時の見直しを行い、一人ひとりに合った支援に繋げている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケア記録に様子を記録し、変化がある場合は連絡ノートで情報を共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	一人暮らしや家族が遠方の方も増え、その時々によって利用者のニーズも変わるので、柔軟な対応を心がけている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	努めている。		

認知症グループホームたのしや駒ヶ根・けやきユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者のみならず職員も高齢化し、増えた急変に対応する能力体力も落ちてきた為、R5年1月から嘱託医を置いて、毎月定期往診に切り替えた。家族でかかりつけ医への受診希望者は引き続き対応してもらっている。	入居時に医療連携についてホームとしての取り組みを説明している。今年1月よりホーム嘱託医を据え、毎月第1・第2月曜の往診で対応している。そうした中でも若干名の利用者は家族対応でかかりつけ医の受診を続けている。各ユニットには1名ずつ(いちいユニットには常勤、けやきユニットには非常勤)の看護師が勤務しており、それ以外に契約している訪問看護ステーションの看護師2名が毎週火曜日に利用者の健康管理に来院し、結果を医師や職員に繋げてくれ、家族にもその結果を職員から伝え安心していただけるように体制を整えている。歯科についても必要に応じ訪問歯科の往診で対応し、3名ほど、毎月の歯科衛生士の居宅療養指導も受けている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師(常勤1名,非常勤1名)は2人だが、利用者やその家族が安心して頂ける様に、月4回定期訪問の伊南訪問看護ステーションと連携して、利用者の日々の体調の変化に備えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院につながる時には、看護師、時にはケアマネも受診に同行し、施設内での様子を伝えている。入院後は、面会に出向き、退院後の施設内環境整備に努めている。年に1回病院で地域連絡協議会を開催してくれている(コロナ禍では中止)		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	家族との話し合い時に、その都度事業所の方針と当施設の設備での限界を伝える一方で、できるだけ長く当事業所で暮らせるにはどうしたらいいかを話し合い、医療含め当施設の設備でできる範囲を理解して頂いている。	重度化と終末期に対する指針があり利用契約時に説明して同意書にサインを頂いている。食事や入浴が難しい状況になり終末期を迎えた時には家族、医師、施設内看護師、ホーム職員で話し合いの場を設け、家族の意向を確認の上、医療行為を必要としない場合に限り、ターミナル介護計画書を作成し、それにサインを頂き、医師の指示の下、看取り支援に取り組んでいる。開設以来13名の看取りを行い、コロナ禍の中での看取りについても家族には居室にて最期の時を共に過ごしていただくことができ感謝の言葉を頂いている。また、看取り後にはケアマネジャーが中心となり振り返りの時を設け次回に繋げるようにしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	スタッフは入職後、消防署で救急救命講習を受講し、利用者急変や事故に即対応できる人材を育成している。		

認知症グループホームたのしや駒ヶ根・けやきユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域住民との防災協定を結んでいる。不測の事態に備えボランティア保険にも入って頂いている。緊急連絡網の訓練を抜き打ち的に行い、職員の災害に対する意識付けを行っている。	10月に消防署参加の下、火災を想定した防災訓練を予定している。消火器の使い方訓練、利用者全員を外へ移動しての避難訓練を予定している。合わせて非常通報装置を使っての通報訓練、防災会社も参加しての防災機器の点検も予定している。備蓄については「おかゆ」「水」が準備されている。当ホームとして地域との防災協定も結ばれており、地域の避難所にも指定されている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	丁寧な対応を心がけている。	言葉遣いには特に気配りをし、利用者が嫌がる言葉は使わないようにしている。トイレ介助の際には大きな声で誘わないよう徹底している。また、「ちょっと待って」という言葉は使わないよう職員間で気をつけるようにしている。呼び掛け方については希望を聞き、苗字か名前を「さん」付けでお呼びしている。中には希望で「お婆ちゃん」とお呼びしている方もいる。入室の際には「ソック」と「声掛け」を徹底し、プライバシーに配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	働きかけを心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	希望に沿った支援ができる様、一人ひとりの気持ちを伺うようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	一人ひとりの好みに添えるように支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者と共に。。。という思いをもって、日々一緒にできる事を模索している。	自立されている方が大半で、一部介助の方が若干名という状況となっている。食事形態は一口大、キザミ、トロミ食と、一人ひとりに合わせている。おかずは基本的に主菜1品副菜2品で、朝食は職員が調理し、昼食の献立は施設長が主菜のみを1ヶ月分考えて食材を発注し、3名の調理職員が交代で他2品の副菜も合わせて調理し提供している。夕食については1品は配食会社の主菜を用い、2品の副菜は職員が調理してお出ししている。また、「五平餅」、お盆には「天ぷら饅頭」、正月には「おせち料理」、土用の丑の日には「鰻」などをメニューに加え、季節の味を楽しんでいる。近隣住民の方から多くの夏野菜の差し入れを頂き、新鮮野菜を味わっている。更に、施設敷地内に柿の木があり秋には全員で干し柿作りを楽しむ予定を立てている。利用者の誕生日会については午後のお茶の時間にケーキと歌、パースデーカードをプレゼントしてお祝いしている。	

認知症グループホームたのしや駒ヶ根・けやきユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	脱水や栄養不足にならない様に看護師が常にチェックしている。献立と食事量を記録して、1日通して栄養がバランスよく摂取できるよう気をつけている。食事量が少なくなった時には栄養補助食品で対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアをする時に、自立してる人には声かけをして、そうでない人には介助に入っている。また食前に口腔ケア体操を取り入れている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々に合わせた排泄パターンを知り、誘導及び声かけをしている。紙おむつの量を減らす為のケアカンファレンスを度々行っている。	見守りを受けながらも自立している方が三分の一強、一部介助の方が三分の二弱という状況で、殆んどの利用者が紙パンツを使用している。職員は排泄記録表を参考に、定時誘導と合わせ一人ひとりのパターンを把握しトイレにお誘いしている。排便については3日間ない場合はコントロールを行い、お茶、スポーツドリンク等で1日1,000cc以上の水分摂取に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便記録をチェックし、個別に看護師が対応及び処置している。水分摂取量が少ない人には、スポーツ飲料、ヤクルト、ゼリー系等ありとあらゆる物を試している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	保清の意味でも、入浴は実施してほしいという職員の希望から、大方の入浴日は決まっているが、常に本人の希望を伺ってから実施する様にしている。リフト浴は週4日稼働している。	全利用者が何らかの介助が必要な状況となっている。基本的には週2回の入浴を行っている。入浴拒否の方も若干名いるが、誘い方に工夫をして入浴していただくようにしている。香りがする檜浴槽とリフト浴が設置された広い浴室が2ヶ所あり利用者の状況に応じた対応するようにしている。入浴剤に合わせ「ゆず湯」等の季節のお風呂も楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中でもひとりでくつろぎたい人や午睡をしたい人には無理して起きてもらう事はせず、個々人のペースに合わせた支援をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	R3年より一処方箋薬局に当施設利用者の薬の保管及び管理をお願いしている。薬の変更やそれに伴う症状の変化等お互いに共有して、嘱託医に繋げる等、医療連携が強化されている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	できるだけ支援をこころがけている。		

認知症グループホームたのしや駒ヶ根・けやきユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍の終了により、感染対策する事を条件に徐々に外出を促している。ただコロナ感染は無くなってないので、十分に注意して貰っている。	新型コロナ禍のため外出は現在も自粛状況にあるが、数名の男性利用者については散歩の希望が多くあり、職員が付き添いホームの周りを散歩している。5月8日以降の新型コロナの5類移行を受け、家族との外出も再開され数名の利用者が感染対策を取った上で外食に出掛けている。そうした中、4月にはドライブを兼ね花見に出掛け季節感を味わっている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	施設内で個々人の小遣いを預かっており、個別の買い物を支援している。収支は毎月家族に書面で報告している。自分で管理希望な方は、当事者と家族の責任の元自分で所持している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望者にははできるだけの支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花を飾ったり、風を取り入れたり、日差しの調整をして、心地よく過ごせるように工夫している。	緑豊かな木々に囲まれ、閑静な住宅や保育園がある環境の中で日々の生活を送っている。ホールの大窓から外に出ると大きなウッドデッキが設けられ、利用者の寛ぎの場となっている。施設内は次亜水衛生管理システムが設備され衛生管理が行き届いている。ホール内は季節ごとの飾りが施され季節の移ろいを感じられる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共有空間が一つしかないのが欠点だが、極力個々人が嫌な思いをしないような居場所作りを心がけている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時、家族と相談して、その時々状況に応じて馴染みのもの、好みのものを持ってきて頂いている。	整理整頓が行き届いた居室には大きなクローゼットが備え付けられている。持ち込みは自由で、家族と相談の上、使い慣れた家具、イス、テーブル、テレビ等が持ち込まれ、家族の写真や誕生日のバースデーカード等に囲まれ思い思いの生活を送っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	セーフティアームや車いす対応の方が増えてきており、介助が必要、見守りのみなど状態に合わせて、利用者の行動が制限されない様にサポートしている。		